

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24730183

研究課題名(和文) 20世紀初期における日中両国の経済思想交流：福田徳三と堀江帰一をてがかりに

研究課題名(英文) The history of Sino-Japanese relations: the dimension of economic thought, 1900-1930

研究代表者

武藤 秀太郎 (MUTO, SHUTARO)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：10612913

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円、(間接経費) 360,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀はじめ、多くの中国人学生が日本に留学し、経済学を学ぶとともに、日本の経済学者が、政府の相談役や講師として、中国をおとずれた。中国人留学生が日本で経済学をいかに学び、日本の経済学者が中国で何を語り、中国人にどのようにうけとめられたかについては、まだ未解明な部分が多い。本研究では、多くの中国人を教え、中国にも渡った経験のある福田徳三と堀江帰一を中心に、当時の日中両国における経済思想交流の一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Early in the 20th century, many Chinese students came to Japan to study economics, and Japanese economists visited China as government policy advisors or school lecturers. It is still not clear how Chinese students in Japan studied economics, what opinion Japanese economists had about China's economy, and how Chinese intellectuals accepted their opinions. This research focused on two Japanese economists, Fukuda Tokuzo and Horie Kiichi to demonstrate a part of this Sino-Japanese relations.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済思想

キーワード：大正デモクラシー 五四運動 新文化運動

1. 研究開始当初の背景

近代日中の経済思想交流史は、これまでおもに、マルクス主義経済思想の日本から中国への伝播について、後藤延子や石川禎浩、三田剛史らによって研究がすすめられてきた。後藤が明らかにしたように、中国でマルクス主義を論じた最初期の文献である李大釗「我的馬克思主義觀(私のマルクス主義觀)」の後半部は、福田徳三の論文を種本にして執筆されたものであった。大正デモクラシー期のオピニオンリーダーであった福田の経済論が、中国の思想界に与えた影響は大きく、著作も『日本経済史論』や『国民経済講話』など、計4冊が翻訳出版されている。

福田と中国知識人との思想的交流について、国内では、本研究代表者が、福田が主導した啓蒙団体・黎明会を中心に、その一端を明らかにした。このほかに、福田の著作を翻訳した陳家瓚に着目した田中秀臣の研究がある。国外では、中国の劉綺霞が、福田の経済思想がもった意義を考察している。しかし、これら先行研究は、いずれも中国側の資料をあまり用いておらず、それらをさらに調査、活用した研究の余地が残されていた。

福田と同じく、黎明会のメンバーとして活躍した堀江は当時、福田や吉野作造に勝るとも劣らない分量の執筆活動をおこなっていた。中国語訳された著書も、確認できたかぎりでは『国際経済総論』や『銀行論』など、計4冊ある。1921年に中国で出版された『社会科学大詞典』でも、堀江は「日本を代表するブルジョア経済学者」として、福田とともにその名を挙げられていた。しかし、堀江の経済思想に関する国内の研究は、管見の限りわずかにすぎない。国外でも、「中国現代銀行の父」とよばれる張公権の教師として触れられるのみである。

このように、歴史に埋もれてしまった感

のある堀江だが、私見では、近代日中の経済思想交流史上において、無視できない役割を果たしていた。とくに、申請者が中国の国家図書館で発見した『財政金融学会講演録』は、堀江が時の中国政府に招かれ、1917-8年におこなった講義の記録であるが、これを具体的に検討した研究はなかった。

本研究代表者は、日中の思想交流がさかんとなる19世紀末から1920年代にいたる時期について、福田徳三や河上肇といった日本の経済学者が、欧米の経済学説をもとに、いかなる東アジア観を形成していったかを、これまで明らかにしてきた。また、福田が吉野作造とともに結成した啓蒙団体である黎明会に着目し、黎明会が三一運動や五四運動に対し、どのような対応をとり、中国や朝鮮の青年知識人とネットワークをとりむすんでいったのかを考察してきた。その過程で、改めて検討に値する人物として浮上したのが、福田徳三と堀江帰一であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、おもに以下の2点である。

(1) 福田徳三は、堀江とともに、慶應義塾大学や政法学校で、中国人留学生の教育にあたった。福田が吉野作造とともに結成した黎明会の活動は、中国思想界からも注目を集めたが、彼の発言は、ときに大きな反響をまきおこした。とくに、福田が『解放』創刊号で、日本の国体は非侵略的で万国無比だと主張したのに対し、郭沫若や周作人、戴季陶をはじめとする中国知識人たちが反発、『晨报』の記者がその真意を問いただしに来たほどであった。

他方、福田が1922年8月から10月にかけて、中国各地でおこなったマルクス主義に関する講演は、大盛況だったようである。とくに、新文化運動の中心的人物であり、

北京大学での司会役をつとめた胡適は福田を、真にマルクス主義を研究した東アジア随一の経済学者と称賛し、日記にも批評が公平であったと記していた。胡適は、1927年に日本へ立ち寄った際にも、福田の自宅を訪れ、欧州情勢に関する意見を聞き、大きな刺激をうけたと語っていた。

黎明会運動期における福田の主張が、中国でいかなる反響・影響をおよぼしたのか、また福田がそれをどう受けとめたのかを具体的に明らかにする。

(2) 堀江帰一は、母校である慶應義塾大学の教員となる以前、三井銀行に勤めていたように、銀行論を専門の1つとしていた。堀江のもとでは、のちに中国銀行総経理、および中央銀行総裁を務めた張公権をはじめとする中国人留学生たちも学んだ。

堀江は1917年10月、張公権の推薦にもとづく梁啓超の要請をうけ、北京へ赴いた。中華民国財政部総長であった梁は、幣制改革実施のために財政金融学会を組織し、その講師として堀江を招請したのである。堀江は1918年1月までの3ヶ月間、当学会で22回におよぶ講義をおこなった。その内容は、逐次『農報』などで報じられ、のちに『財政金融学会講演録』として公刊された。中央銀行の独立性保持、不換紙幣の整理、金本位制への移行といった堀江の主張は、財政・金融政策にたずさわる中国の為政者らに多大な影響を与えたと考えられる。

以上のような、堀江と梁啓超、張公権らの間にみられた思想的な影響関係を明らかにする。

3. 研究の方法

「研究目的」の(1)で論じたテーマの中心人物である福田徳三の著作年表や年譜については、金沢幾子編『福田徳三書誌』がある。ただ、この著作年表・年譜でも、新聞に掲載された福田の論説や言動につい

て、カバーしていない部分もみられる。それゆえ、本研究にとって鍵となる1918年から1922年までについて、まず当時の主要紙を中心に、福田に関する記事のチェックをおこなう。

また、福田は、堀江と同様、多くの中国人留学生の教育にあたったと考えられる。実際、張公権は、当時慶應義塾大学の教員であった福田の指導もうけたといわれている。また、東京帝大へ留学し、中国の財政学普及に大きな寄与をはたした陳家瓚も、福田の著作を翻訳しているように、何らかの接点があったと考えられる。福田は寺尾亨が孫文など亡命革命家のために設立した政法学校でも、「経済原論」を担当していた。福田の発言が中国で反響を呼んだ要因として、こうした留学生とのつながりは無視できない。この点について、福田が教鞭をとった慶應義塾や政法学校、一橋大学関連の資料や、留学生の回想録などをもとに明らかにする。

とくに、胡適については、彼の日記などから、1922年に福田が北京で公演した際に、接待・司会役をつとめたこと、1927年に福田の自宅を訪れ、欧州情勢に関する意見を聞き、大きな刺激をうけたことが、これまでの調査で分かっている。ただ、福田と胡適がどのような経緯で知りあったのか、ほかに2人が交流を交わす機会はなかったのかなど、さらに検討すべき問題が残されている。たとえば、東京高等商業学校での同僚であった澤田吾一が、コロンビア大学で胡適と親しく接していたが、その際に福田のことが話題にあがらなかったかどうか。こうした実態を明らかにするために、『胡適全集』などをもとに考察をおこなってゆく。

「研究目的」の(2)で論じたテーマにとりくむにあたっては、まず堀江帰一に関する書誌的な調査をおこなう必要がある。

堀江の生涯にわたる著作としては、彼が亡くなった翌年に刊行された『堀江帰一全集』（全10巻、1928）がある。しかし、この『全集』に収録されているのは、単行本、および代表的な論文のみで、すべての著述を網羅しているわけでない。初出と再録の異同なども、不明である。第10巻に収録された著作年表についても、たとえば、堀江が北京滞在中に執筆し、『東京日日新聞』に掲載された「支那の幣制改革」（1917.11.19-20）や雑誌『太陽』の「支那経済雑感」（1918.1）、「支那の幣制改革問題」（1918.2）は、漏れてしまっている。同じく巻末にある年譜には、中国に出張した事実も記されていない。中国から帰国後、堀江は「日支両国経済関係の将来」（『太陽』1918.7）という、本研究にとって無視できない論文を発表しているが、これも無記載である。おそらく、堀江は『全集』の倍以上にあたる分量の著作を残しているだろう。そのため、堀江の執筆状況や事績を、当時の文献資料やデータベースなどをもとに、改めて精査する。

また、堀江のもとで、どのような人材が学んでいたかなど、中国人留学生との関わりについても調べる必要がある。堀江は、慶應義塾大学のほか、政法学校でも「財政原論」の講義を担当していた。堀江から学んだ中国人は少なくないと思われるが、この実態を明らかにした研究は、管見の限りない。

とくに、のちに中国銀行総経理、および中央銀行総裁となった張公権は、堀江の経済思想が中国の財政・金融政策におよぼした影響をさぐる上で、重要である。張は、堀江から銀行に関する知識を全面的に学んだといわれている。幣制改革にとりくむ梁啓超に、堀江を講師として招くことを進言したのも、張であった。政治家としての張に関する資料としては、アジア経済研究所

図書館が所蔵する『張公権文書』がある。この『張公権文書』や彼の自伝、中国における先行研究などをもとに、堀江と張との思想的関係を明らかにする。

4. 研究成果

2012年度は、1900年から20年代における日本と中国の経済思想交流史、具体的には福田徳三と胡適や郭沫若、李大釗ら中国知識人にみられた思想交流について、2012年6月におこなわれた日本経済思想史学会大会で、「福田徳三と中国知識人」と題し、報告をおこなった。また、同年8月にチェコのプラハ大学で開催された国際シンポジウム "Japanese Economic Thought: Time and Space" でも、「Fukuda Tokuzo and Chinese Intellectuals」という題で発表をおこなった。2012年度の後半は、こうした前半におこなった報告でえられた知見をもとに、国内や海外で資料調査、収集をおこなった。とくに、2012年12月から2013年1月にわたり、上海、および南京でおこなった資料調査では、福田徳三が1922年におこなった中国旅行の足取りを追跡するなどし、これまでほとんど知られていなかった事実をいろいろと発掘することができた。これらの調査で新たにえられた資料などをもとに、2013年3月に国士舘大学でおこなわれた国際シンポジウム「日本の経済思想 — 近世・近代における経済思想の連続・非連続」で、「大正ユートピアと消費主義」という報告をおこなった。

2013年度は、論文「福田徳三と中国知識人」を執筆、投稿し、『社会思想史研究』第37号（2013年9月）誌上に発表した。また、この時期における日中知識人の歴史的、政治的概念、具体的には「封建」と「民主」という用語の解釈、理解について、2013年におこなわれた日本経済思想史学会例会で、「「封建」と「民主」」と題し、報告をお

こなった。2013年度の後半は、こうした前半におこなった報告でえられた成果をもとに、福田徳三や堀江帰一と同時代に活躍した経済学者であった高橋誠一郎について、調査、研究を実施し、論文を執筆、投稿した。これは、2014年3月付発行の『日本経済思想史研究』第14号に掲載される予定である。また福田、堀江、高橋とともに、黎明会で活動した今井嘉幸と中国知識人の交流について、2014年1月におこなわれた孫文研究会冬季例会で、「今井嘉幸と中国知識人」と題し、報告をおこなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

1 武藤秀太郎「福田徳三と中国知識人」『社会思想史研究』第37号、2013年、75-94頁、査読あり。

2 武藤秀太郎「高橋誠一郎の「協同主義」論」『日本経済思想史研究』第14号、2014年、印刷中、査読あり。

[学会発表](計5件)

1 武藤秀太郎「福田徳三と中国知識人」、日本経済思想史学会2012年度大会、2012年6月9日、関西学院大学。

2 武藤秀太郎“Fukuda Tokuzo and Chinese Intellectuals”、international conference “Japanese Economic Thought”、2012年8月28日、プラハ大学。

3 武藤秀太郎「大正ユートピアと消費主義」、国際研究会「日本の経済思想」、2013年3月7日、国土館大学。

4 武藤秀太郎「封建」と「民主」、日本経済思想史学会2013年度例会、2013年7月6日、慶応義塾大学。

5 武藤秀太郎「今井嘉幸と中国知識人」、孫文研究会冬季例会、2014年1月13日、中華会館。

[図書](計1件)

1 武藤秀太郎「東日本大震災と関東大震災からみえる日中関係」、御厨貴ほか編『「災後」の文明』阪急コミュニケーションズ、2014年、255-75頁。

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

武藤 秀太郎 (MUTO SHUTARO)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：10612913

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：